

戦前期における女性と試験

—— 「結婚」のメリトクラシーについて ——

尾中 文哉

これまで、試験の歴史において、女性は十分に扱われてこなかった。しかし本稿では、自伝を用いて、戦前の「女学校」を分析し、「女性」カテゴリと結び付く独特なメリトクラシーを取り扱う。それは、「女学校」が、「玉の輿」的な「結婚」を通してメリトクラティックな階層上昇（「出世」）を行う場であった、ということである。「女学校」的「良妻賢母」は、人々にとっては、「いい家の奥様」のイメージと重なっていた。このため、女学校は、女中奉公や女工や実業学校や芸者見習いに比べ、性的隔離が厳格で、かつ男性依存的な人生パターンと結び付いていた。但しそれは、女の子自身が選んだというよりも、彼女の属する「家」がより有利な「女性の交換」を行うために採用した手段とみるべきである。このことは、明治30年代以降の「女学校」への受験競争の高まりを理解するのに重要と考えられ、また、現在の女子校・女子大の分析、さらには男性の受験競争の分析にも示唆的であると考えられる。

0. はじめに

これまでの試験の歴史は常に男性中心であり続けてきた。扱われる人物、修学のコースは男性をモデルとしてたてられていた。時折女性が主題となる場合でも、それは特定の仕方だけであって、ひとつは、大部分の女性がメリトクラティックな社会の中へ十分は入り込まずに生きてきた、という言い方であり、もうひとつは、メリトクラティックなシステムが、女性にとって、性差別を乗り越える手段であった、という言い方である（国家公務員試験など）。この2つの感覚は、同じ一つの前提の上にある。これは、社会学が伝統的に抱き続けてきたものであるが、『業績主義』的なものと『属性主義』的なものとは明瞭に区別することができ、この両者は矛盾する、というものである。しかし、梶田（1981）が正しく指摘するように、この区分はそれほどはっきりしておらず、両者の間

には、「アチーブド・アスクリプション」（「学校歴」のように、過去の業績が、属性化する場合）や「アスクライブド・アチーブメント」（大学進学率の民族間格差のように、属性が、業績主義を通して作用する場合）などの中間的な事象も存在する。従って、メリトクラシー（ここではこれを、生まれつきの属性ではなく教育の程度によって社会的地位が決まることを指すこととしよう）という業績主義と、「女性」という属性主義的カテゴリが結び付いている場合もあるかも知れない。本稿では、そうした事象の一つを取り扱いたい。

この着想の最初のきっかけは、学部生時代に行った意識調査にある。それは、「偏差値エリート」にひそむ近代合理主義（手段主義や業績主義）を明らかにし、その内面的帰結を探ろうとするものであった。そこで次のような事実が副次的に明らかになったのである。その調査は、

表1 (=一位 -二位 …最下位)

| (%) | 東大 | A大 | B大 | C短大 |
|--------------------------|-----|-----|-----|-----|
| 〔仕事学業等の達成へ の手段主義〕 | | | | |
| 政治的影響力が必要 (第40問で3) | 46% | 32% | 35% | 22% |
| 目標への自己投企 (第20問で1) | 36 | 21 | 27 | 24 |
| 〔生活の安定への手段 主義〕 | | | | |
| 高い収入を得る仕事が 理想(第34問で4) | 32 | 18 | 42 | 43 |
| 大企業へ就職したい (第35問で1・2) | 69 | 68 | 64 | 83 |
| 計画的で豊かな生活を 送る(第18問で2) | 43 | 40 | 32 | 43 |
| 将来のために貯金する (第37問で3) | 33 | 11 | 24 | 41 |

図1 「手段主義」スコア

(それぞれ、線分の中心が平均を表し、
線分は95%信頼区間を表す。)

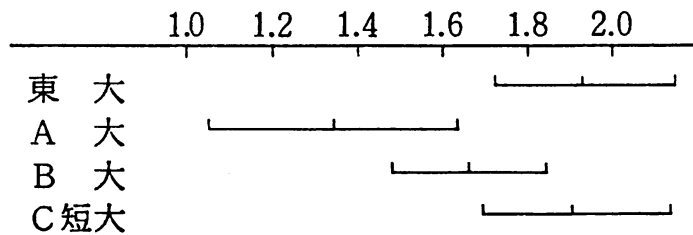
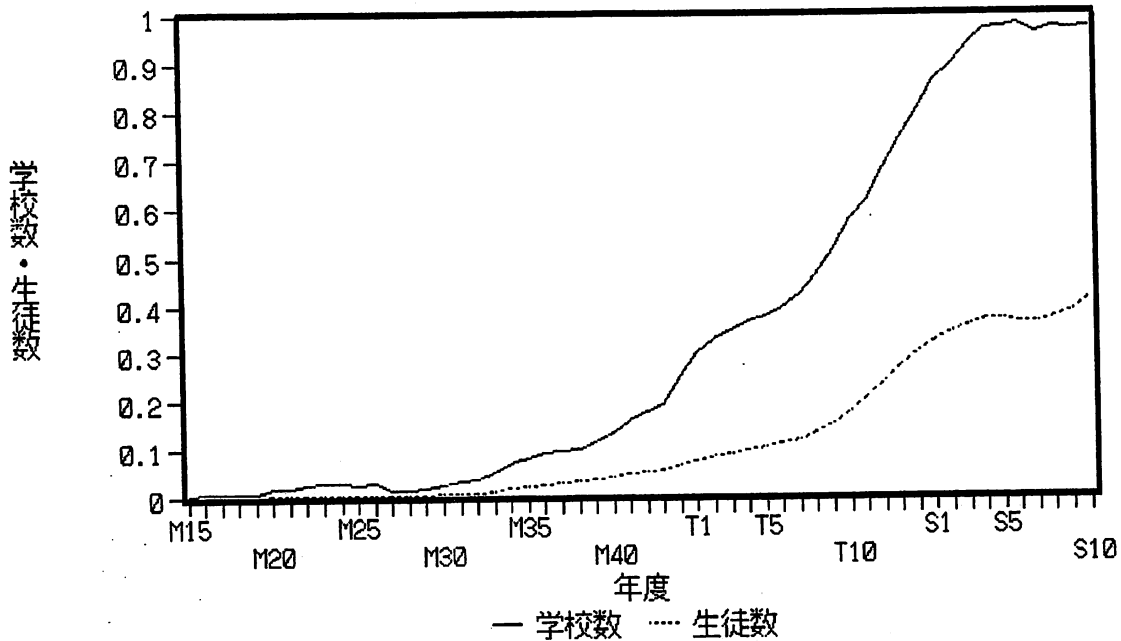


図2 戦前における高等女学校の学校数 (1.0=1000)

及び生徒数 (1.0=1000000) (『日本近代教育史事典』統計より作成)



東大と2つの四年制私大と女子短大の比較対照を行った(ちなみにサンプルの男女比は、東大 95 : 5、A大 66 : 34、B大 75 : 22、C短大 0 : 100)のだが、手段主義に関して東大と同水準の高さを示した大学があった。それが、4年制の私大ではなく、女子短大だったのである。つまり「高収入の仕事がしたい」「大企業に就職したい」「将来のために貯金する」「政治活動は就職にひびくから関わりたくない」「自分が政治的影響力をもつことが必要」「目標をめざし、才能を伸ばし努力する人生」といった項目に肯定的であった場合に点数を与えて集計したとき、平均が同程度だったのである(図1:各々中心点が各大学の平均。付随している線分は95%信頼区間を表す)。当初の仮説として東大生のエリート主義や出世主義ばかり考えていたわたしたちには、面食らう結果だった。しかし、その内容をもてみると、仕事や学業への手段主義は東大生で強いが、生活の安定への手段主義はこの短大のほうで強いことが分かった(表1)。この強さについて、この短大における、安定的な結婚への手段主義がもたらしているのではないか、という仮説が出されたのである(杉山・尾中 1986)。この仮説は、「女性」が、男性とは異なるメリトクラシーに生きている可能性を示唆している。

この主題を考えるために敵切な事象が、戦前期にあると思われる。それは、「女学校」である。なぜなら、ここでは、その名前からして、「女」というカテゴリーと、「学校」という業績主義を特徴とする場所との結び付きを示しているからである。

女学校について

「女学校」とは、小学校を出た後一部の女の子たちが進んだコースであり、官立・私立の「高等女学校」・「実科女学校」から成っている。

た。制度化されたのは明治10年代であるが、以下の学校数・生徒数の増大に見られるように(図2)、明治30年代から大正ひとけた代にかけて女学校への需要は10倍以上に増えている。また例えば、神戸市立高等女学校では入試倍率は、明治35年から39年の4年間で、3.3倍から7.0倍に上昇している(天野ほか 1989)。

これまでの「女学校」についての研究で画期的なのは、深谷昌志の『良妻賢母主義の教育』であることはよく知られている。これは、文部省などの行政や学校資料を駆使することにより、主として思想としての「良妻賢母主義」がどのような系譜と構造をもち、どのように作用していったのかを主題とする。その主な点は、「良妻賢母」が儒教を基盤としながらも西欧の影響のもとに形成された思想であること、そして、それがナショナリズムとの結び付きをもったという点である。この研究は、その後に出た研究のスタイルを規定する先進性をもっていたが、最近では批判も出てきている。つまり、これは、「良妻賢母」という思想をつくりあげ、押し付けようとした者たちの思想構造は明らかにしているが、本当にそれが人々に受け入れられたとはいえないのではないか、というものである(山本・福田 1987)。

最近では、そうした学校側や文部省の思想構造よりも、実際に人々がどう考えていたのか、ということのほうが問題にされつつある。そうした研究の一つは天野郁夫ほかの研究である。

彼らは、篠山地方のインタビュー調査と同時に学校資料の調査を行う中で、高等女学校に関する「人々の意識」を主題化することに成功した。彼らは、結論として、高等女学校が手段性やメリトクラシーをもたない場所であったことを強調している。ひとつに、非実用的な「常識」

や「教養」の形成が中心におかれていたからであり、ひとつに、内部的な落第率が低かったからであり、ひとつに、「良妻賢母主義」というイメージとは異なる「自由」で「解放的」な雰囲気があったからである、という（天野ほか1989）。しかし、この結論は、官立中学校中心の従来の戦前期のイメージからすると目新しいとしても、「女性」カテゴリーとメリトクラシーの対立を主張する点では、従来の見方と同一線上にある。わたしにとって興味深いのは、この結論よりもむしろ、著者の中でとりわけ吉田文が注目している逆の事象、すなわち女学校の学歴が、「結婚」にとっては手段的であった、という観察である。このことは、さきの仮説とも符合するし、また明治30年代以降の「女学校」の飛躍的拡大の説明要因としてかなり有力であるように思える。「女学校」にもしメリトクラシーがあるとすれば、それを探し出す場合にも、やはりこの「結婚」という事象がカギになるかも知れない。このことを念頭に置いて、「女学校」を見ていくことにしよう。

資料について

資料として用いるのは、戦前生まれの女性の自伝である。第一に、日経新聞社編『私の履歴書』の中に含まれる数少ない女性たち、第二に「日本人の自伝」に収められた女性、第三にほるぶ出版の「女の自伝選集」である。前二者はいわゆる成功した有名人の自伝であり、後一者には、多くの無名の、そしてかけがえのない生活史が収められている。

本稿では、煩雑さを避けるため、自伝資料に関しては、(桑沢 1981) といった文献表示を省略し、氏名だけを明記し、文献を指示することにしよう。

これまでの研究は、すでに計量的な事実をかなり明らかにしている。従って、いまなされる

べきなのは、こうした事実を、質的資料を用いて解読する作業である。

1. 女の子の人生パターン

ちょうど女学校へ進む年齢くらい(12-15才)は、女の子のその後の人生の分かれ道になっていることが多い。以上3つの自伝資料に登場するパターンには、以下のようなものがある。

A. 女学校へ行く、B. 女子師範学校へ行く、C. 実業学校へ行く、D. 女工になる、E. 女中奉公に出る、F. 芸者見習いに出る、G. その他。

A. 例えば、鍛冶屋の娘、奥むめおは、師範付属小から女学校を出て、縁談を持ち込まれるが断って豪農の家庭教師をしながら女子高等師範学校へいく。

B. 例えば、小学校長の娘、高群逸枝は、高等小学校から「貧乏人でも入れる」師範学校へ進んだ。後に熊本女学校へ編入したり女工をしたりしながら代用教員となり、婿をとる。

C. 例えば、材木商の娘、堀添絹子は、小学校を出てから、縁談を避けるために九州高等簿記学校へいき、寄宿舎の雑用をしながら置いて貰う。どうしても嫁に行きたくなかったのでマシ商会へ就職し、通信所の男性と知り合い結婚するが死別、炭焼きと再婚する。

D. 例えば、炭焼きの子に生まれた高井としをは、12才で、姉やいとこや近所の子と女工募集人に連れられて大阪手織へ行く。仕事がつらく逃げて工場を転々とする。

E. 例えば、貧農の娘に生まれた上条なつは、小学校の補習科(裁縫)を出て、兄の会社の上役の家に女中奉公に行く。しかし主人にちょっかいを出されてやめ、口入屋の紹介で大阪の家内工業の家や漬物屋の老夫婦のもとに奉公に行く。近所から縁談を持ちかけられるが断って看

護婦への道を歩む。

F. 例えば、母だけしかいなかった増田小夜は、ものごころついたときは既に地主の家で子守をしていたが、12才で上諏訪の芸者置屋に売られる。ふきそうじ、洗濯、使い走りをさせられる生活の後、芸者学校に入れられ三味線や踊りを教えられた後、14才で「半玉」、16才で「一本」となる。

G. その他のパターンとしては、生家や親戚の家で手伝いをしたり、女職人の修行をしたり、モダンな踊り子や女優の道に入ることもあった。

これまで、女学校を取り扱う場合には、女学校に行った人のみを取り上げて論じることが多かった。しかし、本稿では、こうした様々なルートとの比較の中から女学校コースの特色を描き出そうとする。

一見してわかるように、このリストは、庶民の女の子の人生パターンを尽くしているとはいえない。農村や漁村で家の手伝いをして嫁入りして行ったような女の子の人生は、ここでは十分に取り上げられていない。自伝という資料は、どうしても、読み書きを習得しやすい、都市型の女性に焦点をあてがちになる。

2. 人生パターンの4つのタイプと「女学校」の位置

わたしは、これらのパターンから、「女性」というカテゴリーの作用の仕方（性的隔離か雑居か、依存的か自立的か）に着目して、より単純化したタイプわけをつくることができる。

第一は、依存的でしかも性的隔離が明確な場合（「箱入り娘」タイプ）： 例えば、岡山藩家老の娘に生まれた福田英子は、8、9才から屋敷内で「十八史略」・「日本外史」などを教えられ、15才からは、茶・生け花・裁縫一式を教えられ、琴もやらされ、16には縁談がも

ちあがる。彼女の少女時代は、このタイプに属している⁽¹⁾。

このタイプは、わたしたちの「伝統日本」の女性像として非常に馴染みやすいものである。男とは手を触れたこともなく、しかも嫁に行くことだけが重要事だ、という少女期である。けれども、明治日本の女性たちには、もっと多様な生き方があった。

第二は、依存的ではあるが性的雑居に近い場合（「女中」タイプ）： これは、伝統セクターでいえば、女中奉公である。女中奉公は、一種の花嫁修行としての意味をもっており、庶民の娘は、これを経験しないと嫁の貰い手がないと考えられていた。例えば、既に紹介した辻アイは、「おアイさん、女の子はいつまでも家にはイカン、奉公せんと嫁さんにもらい手がない」と言われている。しかし、女中奉公の場合には、士族の箱入り娘とは異なり、男性と接する機会も多く、彼女のように客といざこざを起こしたり、また得意先回り（得意先で三味線の芸を披露）がきっかけで結婚に至るケースもある。

近代セクターでいえば、大部分の女工は、このタイプに属している。彼女らは、高井としをや石屋愛がそうであるように、農村や田舎町から集められて働きにくるわけだが、それは、金を稼ぐと同時に行儀見習いのための奉公と似た感覚で捉えられていたと思われる（もっとも、実際には会社側の宣伝文句に過ぎないことが多かった）。しかも、工場における男性との隔離は明確ではない。女子は寄宿舎に、男子は下宿に住むことが多かったというが、工場内では性的隔離はいい加減で、しばしば色恋沙汰が起き、またそれを仲介する者さえいた。さらにこの結果、「所帯を持つ」ということも生じ得た（農商務省商工局 1905=1967）。

第三に、性的隔離はあるが、自立性への志向がある場合（「芸者」タイプ）： 伝統日本についての通常のイメージとは異なり、この領域は意外に広い。伝統セクターでいえば、例えば芸者である。彼女らは客の前で芸を披露するとき以外は、男性から隔離されている。しかし、武家の娘と異なる点は、彼らが芸で自ら身すぎをおこなっており、しかも、「女紅場」（「女紅」とは女の芸能の意味であるという）で、裁縫を習ったり文字を習うなどして、芸が売れなくなったときにも身を立てていけるように訓練を受けている（井上八千代）、ということである。後に触れるように、結婚も、望ましい未来の一つであった。しかし、それが実現しなくとも芸で身を立て、裁縫を引き受け、運が良くて置き屋の女将にでもなれば、十分に名誉あることだったのである。

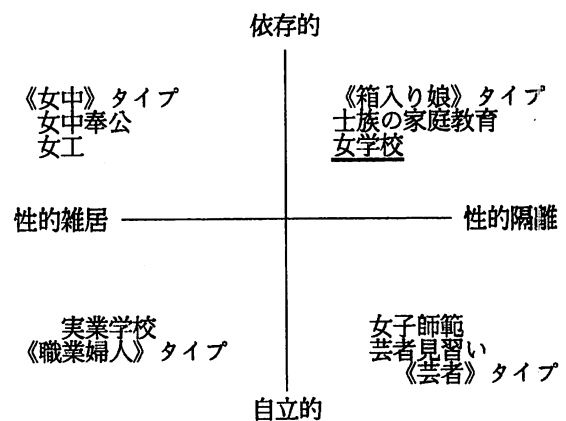
近代セクターでいえば、「女子師範学校」がこれに属している。女子師範を出ていれば、女教師として地元の小学校の教師になって給料をもらうことができ、そうなれば嫁の貰い手がなくとも自活していくことができる。しかも師範学校は官費制だったから、貧しい農家の娘が小学校でよい成績をとったりすれば、たいていこの道を選んだ。

第四は、自立の傾向を持ち、また性的雑居がみられる場合（「職業婦人」タイプ）：これは、伝統セクターで探すことは難しいが、近代セクターに見出すことは、既にこの時代に可能である。例えば、桑沢洋子は実業学校を出た後、喫茶店の店員、参考書の編集、アトリエの内職、造形感覚の教育、「住宅」の取材など仕事を点々とするなかで、カメラマンと知合い、結婚する。そこでは「ともかせぎ」もごく自然な選択である。

さて、この4つのタイプの人生パターンのうち、「女学校」は、いったいどの人生を最も推し

進めていたのだろうか。まず、第二、第四の人生ではない。なぜなら、女学校は、性的隔離を厳密に行う場所であって、男の子との接触は可能な限り避けられた。例えば、運動会には兄弟といえども見にきてはならない場合すらあった。第一と第三のタイプに関しては、この双方が見られた。例えば、淡谷のり子は、「何とか手に職をもたせてやりたい」という配慮から女学校へいかされておられ、第三のタイプに近い感覚が見られる。しかし、より一般的だったのは、女学校を出て適当な時期に縁談が持ち込まれ、結婚させられる、というパターンである。沢田美喜は、岩崎家に生まれ、高い塀に囲まれた一角にすまわされ、そこから女中付きで東京女子高等師範学校付属に送り迎えされる。ときには肌が美しくなるようにとヌカ袋でこすられたりしている。あるとき男性を紹介され、外国生活とクリスチャンへのあこがれからよく知りもしないで縁談を決めてしまう。これはかなり極端な例だけれども、これに近い形で、女学校と縁談が連続していることはしばしばある。このことは、吉田が女学校の学歴が結婚の際に機能を果たしている、と述べていることと符合する。

図3



3. 「女学校」のメリットクラシー

しかし、わたしたちは、この「女学校は嫁入

り資格を構成する」という結論だけで満足できるだろうか。

わたしにこうした疑問を抱かせたのは、金城芳子の経験である。沖縄出身の彼女の父方は、もともと久米の名門であったが、父は、それと「じゅり」（遊女）との間に生まれた子で、東京遊学中に、やはり士族の血筋である母と結婚した。父は官人になるはずだったが、彼女が3才の時に亡くなり、母は「じゅり」相手の店を営んでいた。（「血筋」や「官人」にこだわる彼女の記述は、「上」の集団にアイデンティファイする彼女のメンタリティをよく示している。）彼女は、尋常小学校付属幼稚園から松山尋常小学校へ上がった。そこは「男女7才にして席を同じうすべからず」といった場所であったが、彼女は優等生で、よく級長をしていた。その小学校から県立高女へ進むのは、60-70人中10人ほどの「ディキヤー」（できるやつ）だけであった。高等女学校の教科の程度は低く、作法・裁縫などの時間が多く、「良妻賢母」的な感じだった。のちに女子師範学校と同一の敷地に移ることになるが、女学生は師範生のことをさげすんでいた。というのは、女学生は「お嬢さま」で「いい家の奥様」になる者が多く、師範生は農村出身で職業人を目指す者が多かったからである。当時の沖縄では、ユレー（寄り合い）で婚約まで決まってしまうのが普通であった。彼女は、いとこの朝永と結婚することになるが、そのときこのように言われたという。「お前がディキヤーだといっても、ハクソーとしては最高あの家へ行けば、出世だと思わなくては」。

ここでは、たしかに、女学校の学歴が結婚の決定に作用したと考えられている。しかしそれだけではない。より大事なものは、それ以上の思考、つまり、社会の階層秩序における位置への

こだわりである。つまり、「家」の間にランキングが存在し、身分を構成している（「ハクソー」）。通常は生まれが決定する婚姻先に、彼女の場合には、ある条件が有利に作用した。つまりそれは、尋常小学校や高等女学校で「ディキヤー」であった、ということである。そのことが、彼女の場合には、社会の階層秩序を上昇する可能性を与えた。その、結婚を通した上昇が、ほかの文脈では馴染み深いある言葉、「出世」によって捉えられている、ということである。この事例は、新たな仮説を呈示する。つまり、女学校の学歴が結び付いていたのは、単なる結婚ではなくて、階層上昇すなわち「出世」をもたらすような結婚なのではないか、ということである。もしそうだとすれば、女学校に独特なメリトクラシーが存在していると考えられることができる。つまり、「教育」が、「結婚」という形をとって、「生まれ」に対抗して、階層上昇に結び付く形のメリトクラシーである。

これは、沖縄だけに限った現象とは考えられない。例えば、中村汀女は、入学難を突破して熊本県立高女に合格し、父母にほめられるが、彼女の卒業と時を同じくして縁談が親たちの間ですすめられ、五高卒業で東京の税務署長に赴任するエリートと結婚することになる。ここでは、地主の娘が、近代エリートとの結婚を可能にする手段として女学校が位置づいている。

また例えば、神近市子は、貧しい医者の娘だが、長崎の活水女学校に通っている間に、まず土地の酒屋の長男から縁談が持ち上がり、それを断ると今度は東大出の男性からと、矢継ぎ早に縁談が持ち込まれる。

さらに例えば、平林たい子は、父親から女政治家になるようにとの期待を受けて女学校に入れられるが、「女政治家」とは父のイメージでは、桂公の妾となって権勢をふるったお鯉のこ

とであった。彼女の「たい」という名もそれにあやかっただけであるという。

以上のように、女学校が結婚を通して「出世」するための資格として用いられることが明らかとなった。つまり、女学校を出ることで近代エリートとの縁談を生起させ、その結果「いい家の奥様」におさまる可能性をもたらしているのだ。この、「女学校」のいわば「玉の輿」効果は、「女学校」が、女中奉公や女工や女子師範などときわだって異なっている点なのだ。(結婚の資格というだけなら、女中奉公も同じである。)

こうしたいわば、結婚のメリトクラシーは、けっして女学校が初めてもたらしたものではない。伝統セクターにも同様の考え方が存在した。それは芸者である。既に触れた増田小夜は、「芸者学校」で師匠にバチで殴られながら三味線を仕込まれ、「浜ちゃんと鶴ちゃん(小夜)を比べたら大名のお姫さまと足軽の子の違い」などといわれ、売れなければ極端に差別されたりしながら、一人前の芸者になっていく。武原はんは、宗右衛門町の「大和屋」の芸者学校に通うが、生徒は5、6人で三味線・唄・礼儀作法などをならい、チャリ舞を覚えると「試験」をされ、バチの数で成績を付けられた。また、座敷に出るようになると、花代の売上によって正月の小遣いの量が決まった。こうした、芸者のメリトクラシーのなかで、最大の夢の一つは、芸者遊びをしにくるお金持ちや有名人のパトロンをみつけ、結婚することであった。芸者になるのは、たいがいは貧しい家の子(増田は父なし子、武原は零細な職人の娘)であったから、芸者修行の中で実力を発揮し、売れっ子になり、こうした結婚をすることができれば、不運な境遇を抜け出すことができるわけだ。増田小夜がつぶやく。「結婚とはなんて魅力のある言葉な

んだ」。

女学校のカリキュラムには、しばしば、茶道・華道・琴といった芸ごとが含まれ、習得の度合に応じて免状が与えられた。これは、政府関係者や学校経営者には、儒教的な女訓や西欧的な良妻賢母の要件として捉えられていたとしても、人々にとっては、芸者たちがしたように、芸を身に着けることで「玉の輿」を現実化させるためであったと考えられる。

「良妻賢母」について本稿の資料からいえることは、以下のことである。つまり、学校経営者でなく人々の意識としてあったのは、「妻」や「母」よりも「嫁」という観念である。しかもそれに付随していた規範は、「働き者」や「尻軽ではいけない」といった内容のものであり、「女学校」の教養豊かな女性という理想とはかけはなれている。従って、「女学校」的「良妻賢母」が、人々にとって何らかの意味を持ったとすれば、それは既に述べたような「いい家の奥様」のイメージであったように思われる。

もちろん、芸者にとって結婚が唯一の目標ではなかったのと同様に、女学校においても、常に婚姻による上昇が目指されていたわけではない。奥むめをの父は、「女は嫁にいてもろくなことはない」という信念から、「どこまでも上の学校を出してやるからしっかり勉強せい」といって娘たちを女学校にやった。また、長門美保のように女学校を出て歌手デビューしてしまう場合もある。しかし、大半の女学生に作用していたのは、教育を身に着けることによって「いい家の奥様」におさまるべし、という観念であったように思われる。

4. 「女学校」と「女性の交換」

ここまで論を進めてくると、明治末からの「女学校熱」の正体が次第に明らかとなってく

る。もし婚姻と女学校とが結び付いていたとしたら、女学校を求めていた人々がほんとうには誰であったのかが明確となる。当時の結婚に決定権と関心を持っていたのは、圧倒的に女の子の親、正確には彼女の属する「家」なのだから、「女学校」に関心を持っていたのも、また彼らなのではないか、と考えることができる。

実際に、女学校への進学の際に、大きな決定力を発揮したのは、親の意思であり、親の反対を押し切って女学校へ進学した、という例は以上の資料には登場しない。

例えば、東山千栄子は、華族女学校へ通わせられながら、フランス語・英語を学ばされるがそれは、親が彼女を外交官の妻にする夢をいっていたからである。あるいは、既に触れた中村汀女や平林たい子の場合も、親の意思が娘の女学校行きを決定している。

レヴィ＝ストロースは婚姻を、親族集団間の女性の交換とみる図式を呈示したが、明治大正期の婚姻もある意味で親族集団間の交換である。つまり、婚姻は、女性の移動（「嫁入り」）とそれに伴う財の移動（「結納」及び「持参」）を通して「家」と「家」とが連帯を打ち立てる機会であった。ただし、その場合、どのような家同士の間にも交換が成立する、というわけにはいかなかった。庶民の家にとっては、高い階層の家との婚姻交換は難しかった。そこにおいて、「女学校」は、重要な意味を持つてくる。つまり、娘に「女学校出」という箔をつけておけば、庶民であっても、帝国大学出の高い階層の家の息子との婚姻交換が可能になる、という意味である。女学校の様々な教科は、実際的な用途よりも、このように婚姻交換における交換価値を高める、ということが重要と考えられる。

ただし、「女学校」によるこうした通婚圏の拡大は、一定範囲に限られていた。前節で描い

たような、婚姻と結び付いた女学校通いは、上級士族の娘（沢田美喜、東山千栄子、平塚らいてうなど）を除けば、下級士族の娘（金城芳子、相馬黒光、鳩山春子など）、地主の娘（神近市子、中村汀女など）、大職人の娘（高取静山）において見られる。それ以外の、小商人の娘（淡谷のり子）・小職人の娘（水谷八重子、奥むめを）・小農（杉山春子）などとなると、逆に女学校を女が自ら身を立てていくための場として捉えるようになる。ということは、「女学校」による交換価値の付与が意味を持つのは、予め一定の社会的ないし経済的地位がある場合のみだった、ということである。

逆に言えば、下級士族、地主、富商といった末端支配層は、「庶民」とは「格」が違うのだ、という意識を、末端であるが故に一層強くもっており、子供たちは、庶民の子と混じって遊んだりするとひどく叱られた。（高取焼宗本家の娘は「土百姓の嫁にでもなるつもりか！」と怒鳴られる）。従って、「女学校」はこの層にとって、自分の娘を庶民とは異なる社会的交換圏に属させる手段であったと考えることができる。

このように、「結婚のメリトクラシーの場としての女学校」という考え方は、彼女らの「家」の意思に過ぎない。実際に、女の子が女学校に入るために躍起になって勉強した形跡は全く見られないし、女学校にはいった後も、文学にのみり込んだり、社会主義に夢中になったりしていた。

6. 結論

本稿は、明治末からの女学校への受験競争の高まりを理解するために、戦前期生まれの女性の自伝を用いて、上からのイデオロギーではなく、人々の意識において「女学校」がどのように捉えられているかを扱った。そこでは、女性

というカテゴリーと結び付く、独特なメリトクラシーが見出された。女学生の人生は、女中奉公・女子師範・実業学校・芸者見習いなどと比べ、性的雑居ではなく性的隔離を特徴とし、自立（もあったが、むしろそれ）よりは依存へと向けられた。それは、「女学校」が、多くの人々にとって、「結婚」を通して階層上昇（出世）をする手段だったからである。「女学校」的「良妻賢母」とは、人々にとっては、「いい家の奥様」のイメージだったと考えられる。とはいえそれは、女の子自身の決定ではなく、「家」同士の「女性の交換」において女性の交換価値を高める手段として「女学校」が捉えられている、ということにほかならない。

結婚のメリトクラシー、というこの結論は、次のような広がりをもつ。これは一見、女性だけに当てはまるかのように思われるが、この見方にこそ「女の幸せは結婚にある」という偏見が含まれている。通常、男性の学歴についての議論は、それが会社や官庁に「就職」するためのものだ、という前提の上で展開されてきたが、男性にとっても、やはり結婚のための手段という意味をもっていた可能性がある。とりわけ、明治期においては「婿養子」が広く行われていたのであり、「帝国大学出」ならば、庶民の次三男に生まれた不運な男の子であっても、「お嬢さま」のもとへ婿入りして一気に階層上昇を果たすことができるからである⁽²⁾。男の幸福もまた、結婚にあったのである。そうした「逆玉」の計算が男の子自身あるいは彼の「家」にあった可能性がある。

「女学校」の現在

この時代から、状況は著しく変わった。「共学」が実施され、「家」制度は分解して核家族化し、女性の大学進学率が男性を上回り、官庁や会社のキャリアコースには女性が増大するよ

うになった。けれども、類似のことは実は今日でも見られるのではないか。

女子中・女子高・女子短大・女子大という、性的隔離を原則とする領域は、今も広く存在している。もちろん、それらが男性依存的と言うことは難しい。「良妻賢母主義」に対してすでに戦前から批判が続けられ、現在では、女子校の存在意義は、むしろフェミニズム的な視点から呈示されている。例えば、女性だけの社会をつくることによって、共学では男に任せてしまいがちなことも自ら担い、自ら決定していく機会となる、といった言い方である。けれども他方、女子大が、依然として結婚による階層移動の可能性として存在していることも、また事実である。例えば、ある結婚仲介会社の広告である。それは、あるリストから成っている。あるときは男性の、あるときは女性のリストだが、名前があるわけではない。単に、年齢と趣味と大学名を並べたものが列挙してあるのである。そしてコピーにいわく、「私は、今日、清心卒の彼女と結婚をする」（強調は引用者）。このコピーの前提には、ある種の大学の名前が、理想の配偶者であることの証明ないしブランドとなっていることを示している。（また逆に、この広告の男性版が存在することは、男の場合も、学歴が結婚のためのブランドとして意味を持つことを示している。）

現在、「結婚」は、女性コミックや松任谷由美などにあおられ、いよいよ若い女性の憧れとなっているように思われる（「晩婚化」は、結婚が価値を減じたからというよりもむしろ、それへの幻想が拡大したからではなからうか）。そこでいわれる「三高」という条件は、男性への要求であるばかりでなく、同時に女性への要求をも、即ち高い収入・高い学歴・高い身長をもった男性と結婚できない女性はだめな女性で

あるという、女性にとっての結婚のメリットクラシーをも表現している。たしかにそこでの決定は、かつてのように「家」が行うのではなく、一見彼女ら自身に任されているように見える。しかし、やはり周囲の圧力によって自らの身体を交換財とせざるを得ないという点では、戦前期と類似の構造が潜在しているように思われる。

《註》

(1) もっともそれ以降の彼女は民権運動家として外に出ていくことになる。

(2) 例えば、中農の四男に生まれた田中信弥は、一高・帝大を出て役人をしているうちに28才の時、長州の名家、坂家の婿養子となり、坂信弥として大商証券社長への道を歩み始める。

《参考文献》

- 秋庭ヤエ子 1979=1983 『ナナカマドの挽歌』女の自画像2-17 ほるぷ。
天野郁夫・浜名篤・吉田文・広田照幸 1989 「戦前期中等教育における教養と学歴：篠山高等女学校を事例として」『東京大学教育学部紀要』第29巻、53-80頁。
天津乙女 1984 『私の履歴書』(新版)文化人編13 日経新聞社。
淡谷のり子 1978=1980 『ブルースのこころ』女の自伝選集9 ほるぷ。
福田英子 1903=1980 「妾の半生涯」『日本人の自伝』6、
羽仁説子 1980=1983 『ある人間形成』女の自画像2-5 ほるぷ。
鳩山春子 1929=1981 「自叙伝」『日本人の自伝』7、325-494頁、平凡社。
東山千栄子 1966 『私の履歴書』(旧版)27 日経新聞社。
平林たい子 1967 『私の履歴書』(旧版)29 日経新聞社。
平塚らいてう 1968 『私の履歴書』(旧版)32 日経新聞社。
堀添絹子 1981=1983 『炭山に生きる』女の自画像2-1 ほるぷ。
市川房枝 1961 『私の履歴書』(旧版)13 日経新聞社。
井上八千代 1960 『私の履歴書』(旧版)11 日経新聞社。
石屋愛 1981=1983 『お母さんの思い出』女の自画像2-18 ほるぷ。
海後宗臣監修 1971 『日本近代教育史辞典』平凡社。
梶田孝道 1981 「業績主義社会のなかの属性主義」『社会学評論』第32巻3号、70-87頁。
神近市子 1965 『私の履歴書』(旧版)23 日経新聞社。
上条なつ 1972=1980 『道ありき』女の自伝選集12 ほるぷ。
金子ふみ子 1931=1980 「何が私をこうさせたか」『日本人の自伝』6、75-334頁、平凡社。
川添末子 1977=1983 『人形師への道』女の自伝選集10 ほるぷ。
黒木ハマ 1981=1983 『女一人の約束』女の自画像2-2 ほるぷ。
金城芳子 1978=1980 『なはをんな一代記』女の自伝選集19 ほるぷ。
近藤とし子 1979=1983 『根のいとなみ』女の自画像2-9 ほるぷ。
桑沢洋子 1956=1980 『ふだん着のデザイナー』女の自伝選集10 ほるぷ。

- 増田小夜 1957=1980 『芸者 苦闘の半生涯』女の自伝選集 18 ほるぷ。
- 水谷八重子 1970 『私の履歴書』(旧版) 40 日経新聞社。
- 望月優子 1957=1980 『生きて愛して演技して』女の自伝選集 8 ほるぷ。
- 村山リウ 1978=1983 『わたしの中の女の歴史』女の自画像 2-6 ほるぷ。
- 長門美保 1984 『私の履歴書』(新版) 文化人編 14 日経新聞社。
- 中村汀女 1972 『私の履歴書』(旧版) 46 日経新聞社。
- 西門民江 1979=1983 『峠の道』女の自画像 2-14 ほるぷ。
- 農商務省商工局編 1905=1967 『職工事情』(復刻版)、名著刊行会。
- 奥むめお 1958 『私の履歴書』(旧版) 6 日経新聞社。
- 沢田美喜 1963=1980 『黒い肌と白い心』女の自伝選集 1 ほるぷ。
- 相馬黒光 1936=1980 『黙移』女の自伝選集 15 ほるぷ。
- 杉村春子 1968 『私の履歴書』(旧版) 34 日経新聞社。
- 杉山明子・尾中文哉 1987 「受験競争とパーソナリティ」『マーケティング・リサーチ』No.25、マーケティング・センター、30-44頁。
- 杉山春江 1974=1983 『ライオン婆さんののが笑い』女の自画像 15 ほるぷ。
- 田島ひで 1968=1980 『ひとすじの道』女の自伝選集 14 ほるぷ。
- 高井としを 1980=1983 『わたしの「女工哀史」』女の自画像 2-12 ほるぷ。
- 高群逸枝 1965=1981 「火の国の女の日記」『日本人の自伝』7
- 高取静山 1977=1980 『炎は海を越えて』女の自伝選集 11 ほるぷ。
- 武原はん 1984 『私の履歴書』(新版) 文化人編 13 日経新聞社。
- 田中絹代 1984 『私の履歴書』(新版) 文化人編 13 日経新聞社。
- 寺尾とし 1980=1980 『伝説の時代』女の自伝選集 13 ほるぷ。
- 辻アイ 1980=1980 『母ちゃんが書いた』女の自伝選集 16 ほるぷ。
- 筑紫美主子 1981=1983 『旅芸人の唄』女の自画像 2-4 ほるぷ。
- 山本礼子・福田須美子 1987 「高等女学校の研究(第二報) 高女卒業生のアンケートから」『和洋女子大学紀要』第27集、文系編。
- 山崎近衛 1977=1980 『火筒のひびき』女の自伝選集 3 ほるぷ。

(おなか ふみや)